



前日夜の地震で落ちた図書室の本たち…。(2月14日 午前)

散乱していた図書室の本も、週初めには整理され、もとの場所にきれいに戻されていました。

先週末の大きな地震に、あの日のことがよみがえった人も多かったのではないのでしょうか。県内でも被災された人が多くいらっしゃいます。臨時休校の学校も出ました。一日も早く安寧の日が戻ることを願っています。

学校の図書室ばかりでなく、多くの公立図書館でも本が落ちたり、書架が破損したことなどが報じられていました。ラトブにあるいわき総合図書館もそうです。多くの職員の方が、早い復旧と再開をめざし努力されたことでしょう。

ラトブの図書館という思い出すことがあります。以前館長さんと一度だけ手紙のやりとりをしたことがあります。利用者としてうれしいことがあり手紙を書き、その返礼を受けたのです。その文面にはこのように書かれていました。

「このたびは心温まるお手紙をいただき、恐縮に存じます。早速、窓口の担当職員はもちろん全職員に知らせたところです。様々な要望やお叱りを受けることが多くありますが、お手紙をいただきホッとした気持ちにさせていただきました。」私信になりますが、館長さんに宛てた私の手紙の全文を裏面で紹介します。

図書館と 地震と

いわき総合図書館長 様

昨年末にうれしいことがありました。いわき総合図書館に本をお借りしに行った時のことです。

PC上で期限切れのカードを更新する担当職員の表情が一瞬止まり、何かを見つめる眼になりました。そして次のように話しました。「栞(しおり)をお預かりしています。」ここで本を借りたのは確か夏休み、4か月も前のことです。しおりと聞いても、最初は何のことか理解できませんでした。少し照れもあり、「いいんです。」とあまり関心のないような私の口ぶりに、「手作りですよ。」とその女性職員は言って、探しに席を立ちました。

数分後、手渡された栞には確かに見覚えがありました。今から十年程前のことでしょうか、仕事を休んでいた妻が私のために作ってくれた一枚で、薄緑色の厚紙にお菓子のひもをつけ、雪だるまのシールが貼ってあります。この色は家内が好きな色であり、私もその手頃な大きさから好んで使っていたものでした。

冬休みの友とすべき本を3冊借り、帰途についた私でしたが、何かしら温かなものを感じうれしい気持ちになりました。

図書館では私物が返却図書に紛れ込んであることはよくあることなのかどうかは知りません。拾得物を保管し、あるべき機会に持ち主に返す——図書館職員にとっては業務上当然なことなのかもしれません。

それでも、返却図書の整理中に手作りのしおりをみつけ、その一葉に何らかの物語を想像し、大切なものとして保管していただきました。担当された方の心の温かさにまずお礼を申しあげます。そしていつ持ち主が来館しても、図書館職員の誰でもが対応できるようにシステムになっていることに感謝いたします。



私の好きな作家 M-エンデは、ある物語の中で、自分が遭遇する未知の出来事に名前をつけることができれば、恐れずに未来に進めると話します。世界はことば(名前)からできている、それを知ることが自分自身の世界を広げると言います。

図書館は、そんな未来をひらく言葉の宝庫として、老若男女を問わず開かれています。そこに勤めていらっしゃる方が、本の友とも言えるしおりに対して、今回のような小さな小さな一枚のしおりに対して、大切に扱ってくださったことに敬服いたします。

「手作りですよ。」と、少し強めに(私にはそのように聞こえました)おっしゃられた職員の方の言葉が耳に残りました。家に帰り、蔵書にはさみ込まれたままで忘れられていた他の栞を探しました。それらを手に取り、作ってくれた家族の思いを、長い時を経て改めて感じ取ることができました。

震災後だからと言うわけではありませんが、幸せとは小さな出来事の積み重ねの上にあるのでしょうか。小さな栞を介して私は幸せな時間を持てました。

ありがとうございました。

平成24年1月4日 石井秀吾